

評・三浦 佑之 (古代文学研究者)  
立正大教授

ほとんどの人は意識する隙もなく時代に流され、いつのまにやら抜け出すことのできない暗闇に引きずり込まれている、そのような時代がほんの70〜80年前にはふつうにあった

## 時代の中で輝く反逆者

できたが、一方で身びいきな解釈も含まれていくかもしれない。しかし

かし本書には、そうした疑いをはね返して余りあるおもしろさがあり、興味深いドキュメンタリーとして引き込まれ一気に読了した。描き出された大杉栄と伊藤野枝は、国家に対する反逆者であるというのに、時代の中できらきらと輝いている。

ことを、私たちはほとんど忘れていた。大逆事件があり韓国併合があった1910年は、その幕開けの時だったか。それから13年を経て関東大震災があり、その2週間後、アナキスト大杉栄とパートナーで女性解放運動家の伊藤野枝は、憲兵隊に拘束されて惨殺され、井戸に投げ込まれ埋められた。首謀者は悪名高き甘粕正彦だが、世間は彼の蛮行を賞賛した。二人がたまたま連れていた幼い甥もなぶり殺しにしたというのに。

大杉栄と伊藤野枝(本名はノエ)

についての従来の記述に誤りが多いことに義憤を感じていた著者が、野枝の叔父であり育ての親でもある代



弦書房  
2100円

◇やの・かんじ 1948年、大分県生まれ。書評家、映画評論家。著書に『なりのり映画考』など。